

FORUM

Vol.1

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

創刊号

CONTENTS

巻頭言 2

大阪府立大学長 南 努

FORUM創刊にあたって 2

総合教育研究機構長
高等教育開発センター長 宮本勝浩

GPAとCAPについて 3

高等教育開発センター主任 高橋 哲也

FD探訪 4

～第1回 工学部海洋システム工学科～

コラム「FDって何だろう」 6

新任研修報告 6

FDセミナー（2005年度第1回）報告 7

編集後記 8



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

●大阪府立大学長

南 努

TSUTOMU MINAMI

少子化により18歳人口が激減する中、国立大学が法人化され、大学は国立・公立・私学を問わず、大競争時代に突入しました。振り返ってみますと、数年前まではいずれの大学においても研究面での競争に重点が置かれてきましたし、文部科学省でも21世紀COEプログラムを設けて、研究予算の重点化配分が行われてきました。しかし、ここ数年は、特色GP、現代GPなどGP (Good Practice) という形で特色ある教育への取り組みに、予算を重点化して配分する試みが行われています。大学は教育内容の質の面でも競争する時代になりつつあります。

3大学が統合され、この4月に新たなスタートを切った大阪府立大学においても、この大学教育をめぐる競争にも勝ち抜いていくことが重要な課題となります。そのためには、教育内容を公開して評価を受けるのはもちろん、さらにその質の高さを宣伝していく必要があります。では、教育の質を測定する基準はどこに求められるのでしょうか。その一つの目安としては卒業生の質ということになると思われます。次世代を支える優秀な人材を輩出するこ

とは、大学としての最大の社会貢献であり、大阪府の公立大学法人として果たさなければならない大きな使命です。

この使命を実現していくためには、FD (Faculty Development) の取り組みが必須の前提となります。もちろん、FDとは単なる授業改善にとどまるものではなく、カリキュラムの改善、授業時間外での学生支援、新たな教授方法の開発など、多方面にわたる活動を含んでいます。本学の「高等教育開発センター」は、こうした取り組みの中心となる組織として設置されたものです。

正直申しまして、これまでの大阪府立大学はこのFDの取り組みが十分に行われてきたとは言えません。そのため、多くの課題を短時間でクリアして行かねばなりません。決して、平坦な道のりではないでしょうが、高等教育開発センターには、「いかに教育を良くしていくか」という本来の目的に常に立ち返ってFDを全学で推進していく核となっていくことを期待します。また各部局には、センターと連携しながら、それぞれの部局の特性にあったFDを推進していけるようお願いいたします。

FORUM創刊にあたって

- 総合教育研究機構長
- 高等教育開発センター長

宮本勝浩
KATSUHIRO MIYAMOTO

大阪府立大学は、平成17年4月1日に大阪女子大学、大阪府立看護大学と統合再編し、公立大学法人として新たなスタートを切りました。そして、教養教育・基礎教育を担う総合教育研究機構が新たに設立され、その中に教育内容や教育方針の充実と改善をはかる「高等教育開発センター」と、大学の教育・研究の成果を社会に還元して地域に貢献する「エクステンションセンター」の2センターが設置されました。

高等教育開発センターは、大阪府立大学のファカルティ・ディベロップメント (FD) の中心的な役割を果す

機関であり、大阪府立大学の教育の充実と改善に努めます。現在の経済社会では、顧客満足度が企業の評価、業績につながります。これからの大学では、学生、院生の教育に対する満足度や、教育の成果が、大学の評価を決める大きな要因になります。高等教育開発センターは、各教員の授業目標の設定、詳細なシラバスの作成、成績評価基準の明確化などの支援、さらに学生、院生の教員の授業に対する評価などの業務を行うことを通して、大阪府立大学の教育内容や教育方針の充実と改善をはかって参ります。



と



について

●高等教育開発センター主任

高橋哲也

TETSUYA TAKAHASHI

今年度4月からCAP制とGPAという、合併前の3大学にはなかった教育制度が取り入れられました。CAP制は、半期の受講申請可能単位数を制限する制度で、本大学では資格科目等を除いて25単位となっています。GPAは各科目にGP(Grade Point)を割り当ててその平均を取るという制度です。GPは60点未満が0、60～69が1、70～79が2、80～89が3、90～100が4、と決まっています。2つの制度自体は4月に配布された「履修要項」に書かれていますので、ここでは、何故このような制度を導入する必要があるのかについて述べておきます。

CAP制は、大学の単位制度を実質化させるために導入される制度です。大学設置基準では

第二十一条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

とあります。これを読んでどう思いました?大変ですよね。24単位を取るには $45 \times 24 = 1080$ 時間必要です。大学の授業時間は、 $1.5 \times 15 \times 12 = 270$ 時間 ですので、残りの810時間が授業時間外の学習です。夏休みなども含めて26週で割るとして、毎日、4時間半は授業時間外の勉強が必要だということになります。この程度を上限として、きちんとした学習時間を確保しなさいというのがCAP制の趣旨です。勿論、この24単位が適当な数字か、週1コマの授業が12個別々にあっていいのかなどはこれからも考えていかない

といけません。

GPAが目指すのは、大学の教育の質のコントロールです。今まで、大学の成績というのはかなり「あいまい」なものでした。単位を集めて卒業できればいいといった認識を許していた面は否定できないと思います。GPAは「可」(GP=1)ばかりではいけませんよということを数字で表して、2.0が一つの目安となります。ただ、種類の違う科目で平均を取ることにどれだけ意味を持たせるかという点は多いに問題で、評価する際に(ある程度の)等質性が必要となってきます。少なくとも GPが4の学生が誰もいない科目とGPが4である学生が50%の科目をどちらか選択できるようでは、平均を出す意味がなくなり、学生にも不公平感が募るでしょう。また、学生側から見ると自分のGPの根拠を知りたいという要求が増えてくるでしょう。成績評価、授業内容の学生への提示ということを事前に「シラバス」で学生に周知することは教員として当然の責務となります。

CAP制、GPAともこういう制度を組織的に導入することにより大学全体の教育を良くするための制度です。そのために上手に活用していきましょう。



F D 探 訪

～第1回 工学部海洋システム工学科～

本誌では学内でFDに積極的に取り組まれている学部・学科等に取材し、ご紹介していきます。第1回として、工学部海洋システム工学科にご協力いただきました。

変動と危機感を改革の原動力に

まずは授業取材の打ち合わせを兼ねて、同学科の奥野武俊教授、馬場信弘教授、大塚耕司助教授にお話を伺いました。同学科では、1991年頃から提起されていた工学部の再編問題を契機として、カリキュラムの見直しが始められました。同学科(旧船舶工学科)を志望する受験生が減少していた当時、他学科にも増して危機感が強く、助講層の教員は毎日のように集まり、大学の使命やその中で学科の位置づけ等について、1年近く議論されたといいます。結論として意見が一致したのは、学科の専門領域を「船舶」から「海」に広げることでした。このコンセプトには、従来の教育・研究の対象であった船や海上構造物といった人工システムを扱うのみならず、それらを取り巻く自然環境や、構築・使用する側の人間を自然システムとして捉えた上で、両者の調和を地球システムという文字通りグローバルな視点から構想する知としての「海洋システム工学」の発展を目指すという意味が込められていました。

このようなコンセプトを具体化した同学科のカリキュラムの中で特色となっているのは、学生の「一人一人が問題を発見し、知恵と情報を総動員し、新しい自分自身の解を見いだす訓練を通して『自らを創成する』ことを目的とする」*科目、いわゆる「創成型科目」を多く組み込んでいる点です。

*工学教育プログラム実施検討委員会パンフレット「新工学教育プログラムガイドライン」より。

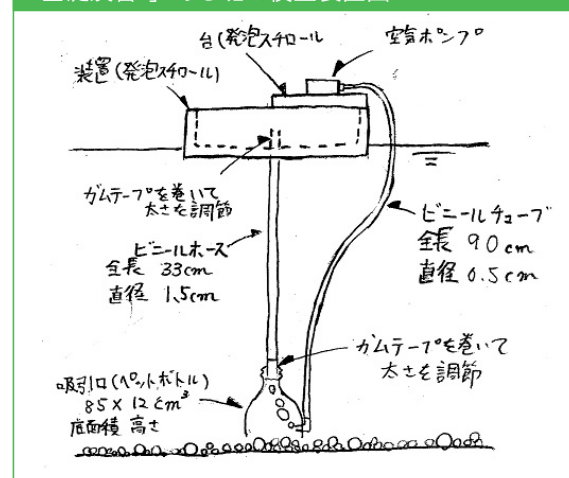
そのうち「海洋システム工学基礎演習Ⅰ」と「海洋システム工学設計演習Ⅱ」(旧カリ名称)について、実際に授業を訪問して取材させていただきました。

創成型科目の実例— 「基礎演習Ⅰ」と「設計演習Ⅱ」

①「基礎演習Ⅰ」

この科目は1年前期に割り当てられており、カリキュラムの中では「海洋システム工学教育の導入的役割の一端を担う」科目と位置づけられていますが、数学演習、海洋システム施設見学会、関西船舶流体力学研究会でのスチューデントパネル(ポスターセッション)参加など、多彩な内容が盛り込まれています。取材では「プロジェクト発表会」を参観させていただきました。「プロジェクト」というのは、ペットボトルや発泡スチロールなど身近な材料と小型エアポンプを使って、海底のマンガ

「基礎演習Ⅰ」:ある班の模型装置図



ン団塊を採取する機器の模型を設計・製作するというものです。クラスがあらかじめ9つの班に分かれ、この日に備えて作ってきた模型の性能——海底鉱物に見立ててペールの底に沈められたビ



「基礎演習Ⅰ」:模型を実際に作動させる

一玉やプラスチック球を一定時間内にどれだけ多く採取できるか——がコンペ形式で競われました。教室での発表会で製作に工夫した点・苦労した点を語り、またコンペで“自作機”や他班の模型の出来映えを見つめる学生たちは実に活々としていて、この日1回だけの参観ながら、創成型授業の利点——学生に自主的・積極的な問題発見・解決を促すことによってモチベーションを高める——を印象づけられました。

②「設計演習Ⅱ」

3年前期配当のこの科目では、海上に浮かぶ浮体式水族館の設計について、入場料の損益分岐点計算といった経済的側面も含めて演習し、その過程で海遊館等の現地見学も行っています。取材に訪れたときの演習課題は、学術情報センター演習室のパソコンを用いて「東アジア（日本を含む）の内湾に設置する5,000人収容可能な浮体式水族館の初期設計を行う」というもので、評価は建造物として力学的見地から検討するばかりでなく、地域性・集客力・景観とのマッチングなどの観点からもなされるということです。この科目でも作業は班別に行われており、授業中の演習室は、議論する学生たちの声で活気に溢れていました。以下、インタビューした学生たちの感想です。

・創成型科目は課題が大変だがやりがい

がある。

- ・自分たちが建物を造っているような感覚でできるところが楽しい。
- ・自分たちで考えているときに出てきた問題を解決する際に、講義で聴いた内容を実地に活用することができる。
- ・みんなでアイデアを出し合ってまとめていくところが面白い。

（保田）

※以上執筆にあたり、海洋システム工学科の先生方よりご恵贈くださった下記論文を参照させていただきました。記して深謝申し上げます。

奥野武俊「大阪府立大学海洋システム工学科がめざしてきたこと」『日本造船学会誌』869号、2002。

細田龍介・岸光男・馬場信弘「ゆるやかな枠組のびやかな発想—実験・設計演習による工学的創造性の養成—」『工学・工業教育研究講演会講演論文集』日本工学教育協会、1991。

大塚耕司「海洋システム工学における創成型設計演習の試み—浮体式水族館の初期設計—」『工学・工業教育研究講演会講演論文集』日本工学教育研究会、2002。



「設計演習Ⅱ」:演習室での共同作業

COLUMN

FDって何だろう

4月に発足しました高等教育開発センター（以下、単にセンターと略します）の主任の高橋です。このセンターが発行するForumでコラムを書かせてもらうことになりました。忙しい大学業務の息抜きにでも読んで下さい。

FD (Faculty Development) という言葉は、今日では大学教員で聞いたことのない人はいないと思います。去年、出席したFDについてのセミナーでも日本のFDの第一期は終わったという報告がありました。啓蒙の段階が終わって実質

的な成果に向けて進む時期だが、一部教員に負担がかかりすぎていて既に制度疲労がおきているという内容でした。幸いにも(?)大阪府立大学ではこれから組織的な取り組みが始まりますので、他大学の取り組みを参考に、形骸化せずに実質的な成果を伴うように進めていければと思います。（この部分は笑うところです、念のため）

さて、FDの定義については人に

よって多少の違いがあるようです。大阪府立大学では、「大学の教育を良くするための組織的な取り組み」と定義したいと思います。したがって、カリキュラムの整備、学生の履修指導、授業時間外の学習指導といった直接的なものだけではなく、図書館の自習室のスペースを拡充してTAを配置するといった学習環境の整備も含まれます。とにかく、個人レベルではなく、学科（専攻）・学部（研究科）といった組織でいかに教育を良くするかということを常時考えて、その内容をチェックし、更に改善していくという作業を毎年行っていくということです。そして、最も大事なものは「やっているというアリバイ作り」ではなく「本当に教育を良くしよう」という意志だと思います。

高等教育開発センターは、情報発信をしていくための組織で、実際のFDの取り組みは総合教育研究機構も含めて各部局です。全学で「やらされている」のではなく、「学生のために主体的に」取り組んで実質的なFDを進めていきましょう。

（高橋）

本学では、本年度より、新しく着任された教員の方々を対象に、本学の理念・教育方針・教育体制について周知徹底を図るための研修会を行っています。本年度は4月1日付けで69人の新規着任があり、これらの方々を対象とした新任教員研修会が、高等教育開発センター主催のもと、4月4日に中百舌鳥キャンパス学術交流会館多目的ホールで行われました。当日は、南学長と宮本理事（高等教育開発センター長）による挨拶のあと、石井学生センター長から、本学の学年暦や履修規定などに関する説明が、高橋高等

教育開発センター主任からは、本学が今年度より導入したCAP制とGPA*についての詳しい説明がありました。

なお、当日の出席者数は、37人（出席率約5割）でした。公務等で出席できない方もおられたよう

ですが、せっかくの研修会ですので対象者全員が出席できるような方策を考える必要があると思われます。

（川添）



報告 新任研修

〔脚注〕

*CAP制とGPAについては、本号3ページに詳しい説明が掲載されています。

REPORT

FDセミナー (2005年度第1回)

報告

6月8日、第1回FDセミナーを開催いたしました。講師には、九州大学教授の関口正司先生をお招きし、「認証評価を念頭に置いた自己点検・評価のあり方について」と題して講演をして頂きました。

このFDセミナーは、昨年度の高等教育開発センター設立準備委員会が開催した3回を含めると、4回目になります。しかし、参加者は、今回が最も多く96名となりました。今後も、学内の多くの教職員の参加を得られるような企画を行なっていきたいと思います。

今回のお話は、認証機関による大学評価（認証評価）がテーマでした。講師の関口先生は、認証評価を御所属先の大学が受けるにあたり主導的な役割を担われてきた先生です。その意味で、認証評価を受けるにあたっての実際的なポイントについて、十二分に満足のいくお話を聞くことができました。とりわけ、「評価のため」に作業をするというのでは「評価づかれ」を起こしてしまうので、本当に大学の教育をよくしていくために、評価という作業を行なうことが大切であるという趣旨のお言葉は傾聴に値するものでありました。

日本のすべての大学は、平成14年以降、認証機関による評価が義務づけられました。本学も、決して例外ではありません。認証評価は避けて通ることができません。認証評価をネガティブにとらえるのではなく、大学教育を良くしていくためのものとしてポジティブに受け入れる必要があります。認証評価をどのようにして実りあるものにするのか。そして、その作業をどのように円滑にすすめていくのかが問題となります。

講演者の関口先生の著書『教育改善のための大学評価マニュアル』の「まえがき」の次の文章は今回のセミナーでも強調されたことです。また、認証評価を受ける本学の教職員すべてに参考になる文章でありましょう。「本書の執筆に至った主な理由は、2つあります。第一の理由は、大学評価が決定的な重要性を帯びているという事実を、どのような評価の作業が必要とされているのかを具体的に示しながら強調したい、ということです。第二の理由は、評価実務の内容を解説することによって、評価の実際の仕事における負担軽減に役立ちたい、ということです」。

すなわち、大学評価の重要性をいかに自覚するのか、そして、評価の実際の作業について、いかに無駄を省いて効率よく行なうのか、この2つのポイントを関口先生は説いているのです。今回のセミナーにおいても、それらの点について熱く語られました。

(高根)



編集後記

高等教育開発センターより『Forum』創刊号をお届けします。

本センターは本年4月、全学教育改革という大きな課題にとりくむ組織として発足しました。まだ4か月ほどの活動経験しかありませんが、試行錯誤を重ねるうちに、これからのとりくみの道筋がぼんやりとみえてきたのではないと思うこのごろです。

ところで、「フォーラム」という言葉は、古代ローマ時代の「公共用広場」が起源とされています。この広場には多くの市民が参加して討議がおこなわれ、さまざまな情報が飛び交っていたようです。

このような意味で、情報の発信だけにとどまらず、みなさまからの提案・意見などをいただきながら、本紙が教育改革にかんする情報の集散する場になればと思います。

(山田)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース“FORUM”

平成17年8月10日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
総合教育研究機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21